

『李の花は散っても』

すもも

著者
深沢潮
朝日新聞出版／1980年

ふかざわ・うしお／66年生まれ。12年「金江のおばさん」で女による女のためのR-18文学賞大賞受賞。「緑と赤」他

「李王」に嫁いだ皇族と
独立運動家に恋した女。
国を超えて生きた
女性たちの愛の物語

評者
山内昌之
歴史学者・富士通
FSC特別顧問

1910年の韓国併合は、日本による朝鮮半島の植民地化にほかならない。日本は、韓国併合の本質を美化するために、李朝28代の王にあたる李王垠（イ・ウン）こと李垠（イ・ウン）と皇族・梨本宮方子の結婚によって、日韓融和を一視同仁（すべてを平等に慈しみ差別しない）を囔ろうとした。

しかし方子は、関東大震災や3・1独立運動における朝鮮人への迫害を知るにつけて、夫・李垠の心の内面に広がる荒野にやるせない気持ちを抱くようになる。著者は、朝鮮語学習を通して朝鮮

文化を学ぶことが、方子の戦後韓国での慈善活動の出発点になる事実を長い歴史の射程の中でよくとらえている。小説には、庶民・マサと韓国独立運動の活動家・金南漢との恋愛関係とその悲劇的破綻が、方子と李垠の家族関係の不幸（長男の夭逝と次男の事業失敗）と並行して述べられる。実は、マサの母は梨本宮家の女官・千代浦に女中として仕えていた。マサの母は、その



時に懐妊したのだが、マサの実父は方子とも関係浅からぬ人物であり、この因縁が小説のプロットに陰翳を深める役割を果たす。韓国独立後に方子の活動を支えるようになったマサは、父が誰かを知らないのに、方子はほぼその真実を知るようになる。

小説は、起伏の激しい日韓の歴史をよくとりこんでおり、蘭の栽培やカメラ撮影などの多彩な趣味を楽しんだ李垠が万遍なく描写される。その反

新書DEカルチャー
日本が再び被爆する
金正恩体制下
で北朝鮮の核兵器の製造技術は格段に向上した。その矛先は我々、日本に向けられている。
『金正恩の核兵器』（井上智太郎著）では、もし北朝鮮が核兵器を使用した場合のシナリオを紹介している。北朝鮮の主要敵国は米韓だが、核による先制攻撃を受けるのは、両国と同盟関係にある日本。かねてから当局は「半島で戦争が起きれば、日本が真っ先に放射能の雲で覆われる」と警告しているからだ。

北朝鮮の軍事力は米韓には遠く及ばない。だから、抑止力としてミサイル発射実験を行い、威嚇を繰り返しているという。現在、不安定になりつつある国際情勢の中で、金正恩が核による先制攻撃を目論んでいる可能性は否定しきれない。日本は最悪のシナリオを想定しておく必要がある。